

選択体系機能言語学の翻訳への応用

—— *The Language of Schooling* の翻訳実践例 ——

佐々木 真

Abstract

This paper aims to demonstrate how systemic functional linguistics (SFL) should be applied to translation practices. It shows how academic English descriptions have been verbally transformed into corresponding Japanese expressions, citing the Japanese translation of the book, *The Language of Schooling*. The paper discusses translation strategies with emphasis on the SFL notions: genre, register, metafunctions, lexicogrammar and grammatical metaphor.

This article proposes the use of authentic translation tactics such as (1) unpacking English nominalization into clauses, (2) ranking embedded clauses up to independent clauses, (3) transforming participants the process into circumstantial elements, (4) foregrounding ergativity, (5) changing tense or voices, and (6) prioritizing contextual factors in contrast to lexicogrammatical factors. The manuscript concludes that translation is not a simple transformation from A in the source language to A' in the target language. Rather, translation should be regarded as the recreation of meaning in context through choice as proposed by Matthiessen (2014).

1. はじめに

日本は明治維新より欧米の知識を吸収して、それを母語によって普及できるように様々な語彙を翻訳したり、新しい概念に対して表現を作り上げてきた（柳父、1982）。以来、日本における翻訳は科学技術から、文芸、生活情報にいたるまで広範囲にわたる。昨今は経済やコミュニケーションのグローバル化によって、英語による教育を行うべきだという意見がある。しかし、日本語による高等教育が可能で、ノーベル賞受賞研究者を生み出すまでになっているのは、とりもなおさず、このような翻訳文化によって語彙や表現の礎が確立されたからだという

ことを忘れてはならない。

ところが、明治維新から約150年という長い翻訳文化をもつ日本でも、翻訳は学問的な体系というよりも一種の経験の蓄積を元とする「術」と見なされているのではないだろうか。これは日本に限ることではなく、Bode (2008: 14) は西欧文化におけるラテン文学の翻訳は古いのに、翻訳研究の歴史はせいぜい数十年だと極論を述べている。また日本においても理論研究が始まったのは1990年代であり、学会組織が設立したのは2000年になってからのことである (鳥飼, 2013: 1)。

翻訳がある具体的なテキストを別の言語のテキストに変換する行為である以上、そこから得られる知見は対象となるテキスト固有の記述となることは宿命かもしれない。あるテキストの翻訳過程の記述が他のテキストの翻訳過程に応用できるかどうかが不確定なのは、テキストのジャンルやテーマ、あるいは読者層が異なるからである。しかしながら、翻訳対象となるテキストがどのような社会文化的環境の中で機能するかを分類し、そのテキストが関与するジャンルやコンテキストを同定していくことによって、類似のテキストを翻訳するにあたっての知見を導き出せるのではないだろうか。また、そこに一種の記述と理論の接点が見いだせるのではないだろうか。

この論文では英語で書かれた学術的なテキストを日本語に翻訳するにあたり、筆者自身が翻訳する過程でどのようなことを考慮して翻訳したかを記述し、そこから同種のジャンルに属し、同様の読者を想定するテキストを翻訳する場合の考察点を明示することを目的とする。

2. 選択体系機能言語学の概略

本論では選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics, 以下、適宜 SFL と略す) を理論的枠組みとする。この理論では言語を社会的記号としてとらえ、言語・社会・人間が相互に作用するあらゆる場面や状況を研究範疇とし、その知見は言語構造・機能の記述という基礎的な側面 (Halliday and Matthiessen, 2004; Matthiessen, 2014; Morley, 2000; Teruya, 2007; Bache, 2008) から言語教育 (Christie and Misson, 1998; Unsworth, 2000; Foley, 2004; Christie and Derewianka, 2008)、言語発達 (Williams and Lukin, 2004) や脳科学 (Thibault, 2004; Peng, 2005) といった生物・心理的側面、さらには精神医学分野 (加藤, 2009) という分野にまで広範囲に及ぶ。

社会の中の言語というと漠然とするが、社会の中では様々なコミュニケーションの目的があり、範疇がある。この範疇や目的に応じて、言語によるコミュニケーションの表現形式の手法や方略が変わるが、これの範疇をジャンルという。ジャンルではコミュニケーションの目的と

その表現段階にそった手順が異なり、例えば、ストーリーを語る「物語 (Narrative)」や、過去の事象を物語る「語り (Recount)」などがある (Martin and Rose, 2008)。そして、同じジャンルであっても具体的な場面状況によって言語表現の様式も変化する。主題や参加者の人間関係、そして言語の位置付けなどの要因によってこの場面状況は変化するが、このような因子による言語の変異を言語使用域 (register) という (Halliday and Hasan, 1989)。Halliday and Hasan (1989) は地域方言 (dialect) と対立し、用途によって変化する言語変異として言語使用域 (register) を提唱しているが、現在の SFL では、具体的な場面とのつながりを想定する。

目的と場面状況によって言語機能が規定され、解釈・構築される意味は言語表現によって具現化される。この言語表現のレベルを語彙文法と呼ぶ。語彙文法は文形式だけを規定するのではなく、そこに選択され得る語彙も決める。したがって、語彙文法と呼ばれるのだが、この語彙の選択を視野に入れた節構成を考慮することが SFL を他の言語理論とは一線を画すものとしている。語彙文法は SFL の中核となる層であり、SFL の創始者とも言える Halliday はここを出発点としている (Halliday, 1985, 1994)。語彙文法で規定された語彙は音韻のレベルになり表現層として、実際の音声や文字となる (Halliday and Greaves, 2008)。

選択体系機能言語学の意味する機能とは「意味」とのことであり、言語の意味は語彙や語彙文法から生み出される観念構成的意味、参加者の人間関係から生まれる対人関係的意味、そして、何を主題としてとりたて、何を中心に情報を構成するのかというテキスト構成的意味がある。SFL ではこの意味をメタ機能と呼ぶ (Halliday, 1985, 1994; Halliday and Matthiessen, 2004; Matthiessen, 2014)。メタ機能は同時に作用するものであり、その機能の複合こそ言語表現のなす機能であり、伝達する意味となる。意味は、単に一つの節や文によっても伝達されるが、ある程度の情報は節のまとまりによって表現され、特に書き言葉では段落の概念が重要である。SFL ではある意味のまとまりに対して「テキスト」という概念を適用し、それを単位として記述する。

選択体系とは、ジャンルの層から、語彙文法、音韻の層まで、あらゆることに関与するものであり、様々な選択可能な選択肢と何が選択のシステムとして働くかを記述する。そこには選択の網目、すなわち選択網が存在し、それが体系化して言語が社会の中で機能する (Martin, 1992)。SFL 理論ではどのような選択体系網が存在し、それがどのように体系化されて、実際の言語表現の可能性を与えているのかを模索する。

SFL ではいわゆる分析対象を文レベルに限定しない。談話内にあっては文や節について、それぞれがどのように論理的な修飾関係にあるのかを探る Rhetorical Structure Theory (Matthiessen, 1992; Matthiessen and Bateman, 1991) や、絵本やウェブサイトのように視聴覚情報と言語の混在したテキストを分析するマルチモダリティー (Kress, 2010; Bateman, 2008;

O'Halloran, 2004) のように、社会文化的な中であってこそ言語は機能するという観点から、さまざまな社会文化的な枠での考察も重要視される。SFL 理論は広大な理論ではあるが、その中心的な概念は Halliday (1985, 1994) から Halliday and Matthiessen (2004)、さらに Matthiessen (2014) へと継承されて包括的にまとめられている。また日本語でも龍城 (2006) が概要と応用分野について解説している。

3. 選択体系機能言語学と翻訳

翻訳は起点言語 (SL) から目標言語 (TL) について、表層的な言語表現の相当語句に置き換えるものではなく、その背景にある目に見えない文化についても訳す (鳥飼, 2013: 3)。選択体系機能言語学 (SFL) は広く言語を取り巻く社会的な側面 (文化のコンテキスト)、言語の使用される範囲や場面の側面 (ジャンル・コンテキスト)、目的や場面ごとの選択性と構成パターンの側面 (談話)、さらに表現に直接関わる側面 (語彙文法)、そして表出される音や文字の側面 (表現) の全てを網羅し、意味を中心に考える理論であるため、翻訳においては起点言語での意味を目標言語での意味に相当する表現形式に変換するという考え方である。Matthiessen (2014: 273) は ‘... let me characterize translation as the **recreation of meaning in context through choice**—choice in the interpretation of the original text and choice in the creation of the translated text.’ と端的にそれを表現している。したがって、この50年間の間に SFL を理論的枠組みとした翻訳研究がなされている (Wang, 2014)。特に Baker (1992) と Hatim and Mason (1990) は、ジャンルや言語使用域、談話での照応関係や一貫性、そして語彙文法のレベルまでテキストにおける諸相について SFL の立場を反映させたものとした特筆すべきものとなっている。また Munday (2002) はスペイン語で書かれたテキストが複数の英語訳になっているものをデータとして使い、語彙の統計的な処理と同時に、SFL のメタ機能の観点から SL と TL にどのような差異があり、また複数の翻訳テキストにおける違いを批判的に論じて社会文化的な要因が関与していることを浮き彫りにしている。

Matthiessen (2004) はフランス語、ドイツ語、日本語、タガログ語、中国語、ベトナム語、テルグ語、ピチャンチャチャラ語の言語について類型論の観点から3つのメタ機能がどのように語彙文法で具現化されるかを比較して、自然で意味と一致した表現法 (SFL では Congruent という語をあてる) が言語によって異なっていることをテキスト構成まで含めて述べている。この比較により言語によって自然とされる形式が形態論的に異なるため、翻訳においては SL における自然さを TL における自然さに置き換える場合の大きな参考となる。

日本でも SFL と翻訳についての研究がある。長沼 (2001) は節レベルで主題を焦点としな

がら、英語の節で主題として取り上げられた項目を日本語の主題としても維持できるものと維持しない場合を記述し、英語から日本語、日本語から英語という双方向性において SL から TL への変換の可能性を例示し、翻訳者の介在する余地についても論じている。長沼 (2006) は日英語の名詞化に焦点を当て、英語の名詞表現を単純に日本語で動詞表現に訳すことに疑問を投げ、どちらの言語においても起点言語として名詞化された表現が目標言語の名詞化表現として文化社会的な等価になるかどうかを判断して訳すべきだと提言している。さらに SFL を取り入れた翻訳教育の試行についても報告している (長沼、2005)。王 (2011) は SFL を枠組みとして日本語と中国語の翻訳について取り上げながら、翻訳とは翻訳者が主体となる異文化コミュニケーションという観点から翻訳者と読者を取り巻く環境を考察しているという点で意義深い。

本論では上記の先行研究や知見を踏まえ、自らが翻訳を行った場合にどのように翻訳を行ったかを SFL の枠組みで報告していく。また翻訳をする際に留意すべき事項を論じていく。

4. 翻訳における社会文化的な背景の一例

社会文化的な要因が顕著に翻訳に現れる一例として、*Jony Ive* (Kahney, 2013) の日本語訳、「ジョナサン・アイブ」(ケイニー、2015) がある。この本の翻訳は対人関係機能、文化のコンテキストという観点から大変興味深い。これはアメリカの IT 企業、Apple のチーフデザイナーで、同社のヒット商品をデザインしてきた Johnathan Ive の伝記である。この本の第一章の冒頭は彼の出身地から始まるのだが、オリジナルは次のような書き出しになっている。しかし、日本語の翻訳ではその部分が割愛されている。

According to legend, Chingford is the birthplace of sirloin steak. After a banquet at a local manor house late in the seventeenth century, King Charles II took such delight in his meal that he is said to have knighted a large hunk of meat Sir Loin.

Another product of Chingford, Jonathan Paul Ive, entered the world much later, on February 27, 1967. (Kahney, 2013: 1)

「英国チングフォードはサーロイン・ステーキの発祥地として知られている。ジョナサン・ポール・アイブもまた、チングフォードが生んだ有名人だ。その誕生は1967年2月27日である。」(ケイニー、2015: 22)

Ive の出身地である *Chingford* がサーロインステーキの発祥地で、どうして、腰肉 (*loin*) の美味に *Sir* の称号を与えて *Sir Loin* になったという逸話から始め、それに続く有名なものとして *Ive* の紹介へと繋がっているが、日本語でそれが全く出ていないのには、どのような動機が働いているのであろうか。

まず、対人的関係機能という観点から考えてみよう。対人的関係機能はメッセージの送り手と受け手の関係であり、親密度合い、社会・心理的距離、力関係、共通経験の共有度がその因子として作用する。翻訳の場合、この対人的関係機能が二重化してしまう。すなわち、英語圏における対人的関係と、日本語版における日本語版の対人的関係である。前者の場合には、*Charles II* という王の名称と *sirloin steak* の名称と *Sir Loin* という爵位の関係性を示すことで、*Chingford* とサーロインステーキの逸話を印象深いものとし、読者の関心を引いて読者と著者の心的距離感を縮める作用をもたらす。ところが日本語版ではサーロインステーキの発祥の地という記述だけで、読者の観点からすればチングフォードについての心象が深まることはなく、サーロインステーキのことが書かれていることがむしろ無関係のような、逆の印象を与えかねない。

また、この冒頭で肉に *Sir* の称号を与えたことが *sirloin steak* の始まりと書いているが、この伝記の主人公は *knight* の爵位を授与されてまさに *Sir* と名乗れる身分になっていることが、この伝記の終わりにある。すなわち、この冒頭部分は単にサーロインステーキの始まりを書いただけでなく、そこには現在の *Sir* となった *Ive* という、いわば二重の *Sir* について語るといことでふさわしい導入と判断されたのではないだろうか。この二重性が日本語訳にはなく、この二重性の効果はない。

また文化のコンテキストの観点から見ると、ジョークの効用ということが挙げられる。英語文化圏、特にアメリカではスピーチを始める際にジョークによって聞き手の関心を惹きつけ、これから始まる講演やスピーチ、プレゼンテーションが興味深いものというアピールをする。しかし、日本語訳ではこの冒頭のステーキの逸話がなく、ジョークも英語圏のように作用しない。むしろ公式的であればあるほど日本語ではジョークは否定的な評価を受ける可能性がある。日本語版にステーキの逸話がないのはこのジョークの文化的な効用の違いから削除されたという推測も可能である。

もちろん、翻訳者は翻訳をしたが、紙面の字数の都合など、編集の過程で割愛されたことも考えられる。しかし、割愛されるということ自体、この部位に関して、日本語版では必要な箇所ではないと判断されたことに変わりはない。日本語版の場合、この書籍を読む読者層がテクノロジーに興味深く、文化的な事項には関心が薄いという判断が下された可能性もある。いずれにしろ、この書籍の冒頭において英語版と日本語版の社会文化的な価値観の相違を如実に具

現化していることは興味深い。

5. 翻訳テキストについて

今回、筆者が実際に翻訳したテキストは、Mary J. Schleppegrell (2004) の *The Language of Schooling: A Functional Linguistics Perspective* である。上智大学の石川彰教授を中心として翻訳プロジェクトチームを結成し、それぞれの章ごとに担当し、筆者は第2章と第6章を担当した。

この本は学校での言語活動が家庭での言語活動とは異なり、学問的なものであり、それがどのような特徴なのかを論じている。また子供達が、学校生活に対応できない、あるいは学校での成績が振るわない原因の一つにこの学問的が言語使用があるとしている。選択体系機能言語学を理論的な背景としながら、ジャンルや言語使用域というコンテキストに関連することから、論理的な接続や語彙の選択に関わる観念構成的メタ機能、モダリティーの使用に見られる対人関係的メタ機能、作文や口頭発表の構成に関わるテキスト形成的メタ機能のそれぞれの観点から言語的特徴と子供達の抱える問題、教員の対応について論じている。この本の中で論じられている言語使用については英語教育のみならず、昨今の大学が抱える日本語のリメディアル教育についても応用できることが多々あり、多くの示唆に富む。なお、この日本語版は『学校教育の言語』として、ひつじ書房より2016年に出版の予定である。

6. 翻訳の実践例

それでは、これまでに述べてきた枠組みを考慮しながら、実際にはどのように翻訳をするべきなのだろうか。このセクションでは、筆者の行った翻訳例を通じて論じていく。これらの翻訳例は一つのケーススタディではあるが、このテキストが「学術的な研究書」という一つのジャンルの中において具現化されたテキストと考えるなら、そこに見出される知見は同じジャンルに属するテキスト翻訳に応用できるであろう。ここでは、観念構成的、対人関係的、テキスト形成的の三つのメタ機能を中心とし、その他にコンテキストや文法的比喩の観点から実践例について論じていく。以下、原文と筆者の翻訳した日本語を記載し、そのポイントについて論じる。なお、説明の便宜上、対象となる箇所には下線を引いて示す。

6.1 観念構成的メタ機能

6.1.1 名詞に圧縮された情報を解凍する

“Children of middle-class families, in which prohibitions and prescriptions are more frequently explained, sequences of why questions and answers encouraged, and obligation expressed more implicitly, may be advantaged in learning to recognize implication sequences and interpret the implicit causal relations which organize them logically” (Rose, 1997, p. 60). [P. 29]

「中産階級の家庭では、やってはいけないこととやるべきことが頻繁に説明され、「なぜ」という質問とそれに答えることが奨励され、さらに義務がさりげなく表現される。そのような中産階級の家庭の子供たちは含意的な言語表現の連鎖が分かったり、あるいは含意的な因果関係を解釈できるように学べるという強みがある (Rose, 1997, p. 60)。」

ここでは、名詞の *prohibition* を「やってはいけないこと」、*prescriptions* を「やるべきこと」と訳した。辞書を引けば、*prohibition* は「禁止、差しとめ、禁制」という日本語が表記されているだけである。同様に *prescription* は「命令、規則」の意味が示されている。この文脈において、中産階級の家庭では子供に対する躰が説明される。この訳で、それぞれを「禁止」「規則」としたのは、何を禁止しているのか、何の規則なのかは明確にならない。学生に英文の意味を問うと、辞書に示された日本語の意味を英文の枠に当てはめただけで日本語にしまい、日本語としてまったく意味が通じないものにすることが多い。これは語彙に含まれている意味を十分に咀嚼しないために起こる。語彙のレベルであっても、その語彙が何を示しているのかを翻訳者が掴みとらなければ、使われているコンテキストの中での本当の意味を示すことができない。

語彙についてはさらに文法的比喩 (Halliday, 1985, 1994; Matthiessen, 1995; Simon-Vandenberg, 2003; Tavernier, 2003; 長沼, 2006) という観点から考察しなければならない。文法的比喩とはある意味を表現する場合にデフォルトで使われる文法形式ではなく、別の形式を使って、該当する意味を伝えるという概念である。具体的には、窓を開けてもらいたいという場合に、命令としての意味を伝えるのであれば、*Open the window, please.* のように命令文が自然である。SFL ではこのように自然な形式を *congruent* と呼ぶ。しかし、この窓を開けてもらうという行為を引き起こすためには *Would you mind opening the window?* のように疑問文を使って間接的に行為を引き起こすことも可能である。ある形式を別の文法形を使って言い換えることを比喩的なもの *metaphorical* と呼び、とくに文学的な意味で使う比喩と区別して、文法的比喩 (*Grammatical Metaphor*) と呼ぶ (Matthiessen, 1995: 31)。文法的比喩の典型的な例としては

名詞化が挙げられる。以下に Matthiessen (1995: 32) からの例を示す。

(congruent)

When he was elevated to the thorne in 1851, King Mongkut was forty-seven years old.

(metaphorical)

King Mongkut's forty-seventh year saw his election to the thorne in 1851.

英語ではこの名詞化に見られる文法的比喩が多く用いられ、特に学問的な文章では多様化される。名詞化することによって節による命題を事項化して情報を圧縮できるだけでなく、そこに形容詞を入れて修飾したり、さらにその命題に対して次の上位命題を作り出すことができるという利点がある。日本語でも例えば、「佐々木が昨日 1 限を休講した」という節を「佐々木の昨日の 1 限の休講」のように名詞化して、「佐々木の昨日の 1 限の休講で学生が迷惑を被った」という命題を作ることができる。

しかしながら、この名詞化は情報の圧縮を可能にする一方、同時に情報の抽象化を引き起こす可能性がある。「やってはいけないこと」、すなわち禁止事項としての *prohibition* が当該の文では使われているのだが、日本の読者にはこの圧縮された情報がどのような過程で圧縮されているかわからないために、ただ辞書にある「禁止」という語彙を使って翻訳したのでは何も意味をなさない。そこで、必要なことは名詞化によって圧縮された情報の解凍が必要となる。日本語に翻訳する際には名詞の中に含意される事象変化、あるいは他動性を明記した表現を使わなければ、意味の伝達は難しい。安西 (1982: 121) も *the surest indication* と名詞化で圧縮された情報を *indicates most surely* と変換し、さらに *we can now most surely* と情報を解凍して、「最も的確に知る」と訳す例を示している。筆者の翻訳例では、*obligation* も「義務」でなく、「しなければならないこと」としたほうがさらに意味が明確化できたと反省している。

長沼 (2006) は機械的に英語の名詞句を日本語の動詞句に変換することに疑問を投げかけているが、これも翻訳するテキストの内容と文脈 (コンテキスト) に依存するのであって、名詞を名詞として訳すか、あるいは動詞として訳すかは翻訳するテキストの価値を翻訳者がどのように見抜くかにかかっているとと言えるだろう。

6.1.2 関係節は独立させる

Students cannot learn academic registers and academic content when the spoken explanations they hear lack the technicality they need to develop language resources for disciplinary work in different

subject areas. [p. 155]

「生徒たちは口頭説明で専門的な用語の使い方が示されない場合、学問的なレジスター（言語使用域）や学問的な内容を学ぶことができない。この専門的な用語の使い方は、生徒たちが他の様々な科目で出される課題を行うための言語資源を身につけるために必要なものなのである。」

この翻訳例では、一つの文の中に五つの命題が混在している。すなわち、（１）生徒たちが学問的なレジスターと学問的な内容が学習できない、（２）口頭による説明に専門的な用語の使い方が抜け落ちていること、（３）その口頭の説明を生徒たちが聞くこと、（４）専門的な用語の使い方が必要であること、（５）様々な科目で課題を行うために必要な言語資源を身につけること、ということである。英語の場合は、文法的な構造上、主要部（Head）となる名詞句が先行して、それを修飾する修飾部（Modifier）が複雑な場合には関係詞節を後続させて情報を付加していく。修飾語句が形容詞や名詞で構成される場合は、核となる名詞の前に置かれて、Modifier^Headになるが、関係詞節の場合にはHead^Modifierの順になる¹⁾。

Matthiessen (1995: 107) は節、句、語彙の間で階層下降 (rankshift) と呼ばれる文法範疇の変位と文法的比喩が情報の蓄積を可能にする資源だと述べており、例えば、節が語彙に後続する関係代名詞節として語彙の中に変位することで付加的な情報を内在化させることができる。一方、この資源を使わなければ、それぞれの命題を節としての具現化させなければならず、全体の語彙数が増えるだけでなくテキスト構成的な密度も下がってしまう例が表示されている。翻訳ではむしろ、この概念を逆手にとって階層下降によって内在化された命題を独立させることで、圧縮された情報を解凍して明瞭さが向上すると言えるだろう。

関係代名詞節が日本人にとって厄介なのは、日本語では修飾語句が必ず核となる名詞句の前にくるからである。そのため、翻訳をするとどうしても核の名詞句の前に置きたくなくなってしまう。ところが、いくつもの命題が混在したものを修飾語句として核の前に置くと、情報が混乱して意味の把握ができなくなってしまう。そこで、関係詞は分断して、命題を主眼として独立させた。この方法については安西 (1985: 87) も同様に、関係接続詞節は切って接続詞を補うように指摘している。

関係代名詞節を翻訳する場合に問題となるのは、原文の情報の中で何が核となっているのか、何が修飾語句となっているのかを見抜くことにある。これには SFL 中の修辞構造理論 (Rhetorical Structure Theory) という概念が関与する。この理論は複数の節によって構成されるテキストの中で、節同士の修飾関係を示す理論となっている (Matthiessen, 1995: 55-56)。この

概念では、核 (nucleus) となる節と衛星 (satellite) という修飾関係にある節を図示し、拡張や強調といった修飾意味関係を示すことができる。関係代名詞節が用いられる節においても、核となる語句が何か、そして修飾を示す関係代名詞がその名詞句をどのような意味関係において修飾しているかを同定できれば、その意味関係を維持して日本語を再配置し、自然な日本語表現にするべきであり、その再配置には安西の指摘するように接続詞の補完が必要になるであろう。

また関係代名詞節と同様に、節複合も独立させたほうがわかりやすくなることがある。以下の例では、各節をつなげて1文にすることはせず、独立した節として翻訳した。これも修辞構造理論を考慮し、核となる節と衛星となる節を把握して論理関係を考慮すれば、むしろ明快な表現になる例といえる。

They found differences in what they call *thematic cohesion*—the devices and strategies by which certain information is highlighted and other is backgrounded, how topic shifts are signaled, and how perspective within a topic is established and maintained. [P. 35]

そして、彼らが「主題的照応 (thematic cohesion)」と呼ぶものの中に違いがあることがわかった。主題的照応とはある情報に焦点が当てられ、その他の情報を背景化するための仕組みであり、また方略でもある。これによって、トピックの変化に合図がつけられたり、あるトピックの視点が確立され、維持されるのである。

6.1.3 参与要素を状況要素にする

Research on two tasks—*sharing time*, a typical event of the early years of schooling, and *giving definitions*, a task that is typical of the later years of primary school—illustrates how children use language in different ways to respond to the same tasks of schooling, and how those who choose the less valued forms are typically judged less competent. [P. 33]

学校教育で初年度から行われる典型的な活動の「共有の時間 (*sharing time*)」、そして小学校の高学年で典型的に行われる課題の「定義づけ (*definitions*)」という2つの課題について行われた研究では、子どもたちが同じ課題に異なった方法で言語を使って、対応している様子が示されている。また、価値が低い方に属すると判断される形式を使う子どもは、能力が低い方であると判断されてしまう様子も示されている。

この箇所では、*Research on two tasks* という名詞句が主語となり、*illustrates* がその動詞としてなって、意味としては「二つの課題についての研究が例証する」という意味である。これを「研究は…を示す」としてしまうと、今度は主語と述語動詞の間には長い目的語句が入り、主従関係 (nexus) が薄らいでしまって意味の把握が難しくなる。英語では *indicate*, *say*, *illustrate*, *show* のような表象を意味する動詞を使い、ある事項が現象や結果を示すということを表示する。このような意味の動詞句は言動過程 (verbal process) と呼ばれるが、主語と投射されて表示される事項との関係について日本語では英語のような文法形式はとらない。むしろ「研究で…が明らかになった」とか「研究では…が示されている」のような表現が自然である。例えば、「その研究は新しい結果を示した」、「その研究は新しい治療法の可能性を示した」のように投射部が節ではなく、語彙や句であれば自然なのだが、「その研究は数年内にコンピュータのデータ保存媒体が飛躍的に伸びると同時に、個人ユーザーがあらゆるデータをローカルのデバイスに保管するのではなく、すべてクラウド上で管理することによってデバイスの利用の仕方が大きく変わることになるという可能性を示している。」というように投射部が複数の節、すなわち節複合で構成されている場合には、主従関係が弱くなり理解が容易ではない。安西 (1982: 116) も *A little reflection will show you what a stupid answer that is.* を「ちょっと考えてみれば、そんな答がいかにかバカげているか、きみにだってわかるはずだ。」というような同様な翻訳例を示している。

SFL では節の直接構成要素、すなわち、主語、助動詞、動詞、目的語、補語を参与要素 (PARTICIPANT) と呼び、時間を場所、様態など前置詞で表現される付加的な情報を状況要素 (CIRCUMSTANCE) と呼ぶ。状況要素はいわゆる 5 文型の中には考慮されない要素である。英語の言動過程と後続する投射部においては、投射されたものが語彙・句なのか節なのかによって、言動過程節を参与要素のようにするか、あるいは状況要素のようにするかをコントロールすべきであろう。

6.1.4 起動性 (ergativity) を考える

It is not that they are unfamiliar with the linguistic elements needed, for example, to be lexically explicit, but that for them, the context of sharing with their peers does not prompt them to assume the more academic stance that some children are already aware is required. [P. 34]

これは子供たちが、語彙的に明確にするというように、言語的にどのようなことが求められているかがわからないというのではなく、中にはわかっている子供もいるが、多くの子供たちにとっては、他者と共有するというコンテキストでは学問的な立場をとることが当

たり前だと考えるようにはなっていないということである。

観念構成的メタ機能を考える時には動詞を中心とした動き、すなわち他動性 (transitivity) を基盤として考える。動きを過程 (process) と呼ばれ、それを具現化するのは過程中核部 (Process) と呼ばれる述語動詞である。自動詞・他動詞の違いと目的語への関わり方が過程型 (PROCESS TYPE) によって明示化できる。

しかし、動詞の中には open のように、*The door opened.* という節の主語でも、*He opened the door.* という節の目的語でも同じ名詞句をとるものがある。このような性格の動詞は能格動詞と呼ばれるが、SFL でも他動性を補完するものとして起動性 (ergativity) という概念を考慮する (Halliday, 1994: 163-5)。起動性では動きを引き起こす起動者 (Agent) と、実際に出来事が具現化される対象としての媒体 (Medium) の二つが主な参与要素となる。*The door opened.* では *door* が媒体で *He opened the door.* では、*He* が動作主で *door* が媒体となる。

翻訳で起動性が問題になるのは、使役の構文である。使役は「AがBに～させる」という意味であるが、当該の翻訳箇所では *prompt them to assume* がこれに相当する。動作を引き起こす起動者は *the context* であり、媒体は *them* となる。当然、起動者としての *the context* は抽象的な動作主であり、表面的に現れるのは *assume* を具現化するのは媒体としての *them* である。そこで、このような使役構文ではあくまでも目的語となる媒体が不定詞で示された動作をして、はじめて動作が具現化するのであるから、媒体を主体として訳出して起動者は理由や原因を示す状況要素として扱うのがわかりやすい。これは6.1.3で論じた参与要素を状況要素に変換するということと同様である。

6.2 対人関係的メタ機能

6.2.1 時制を変える

His statistical analysis of a large corpus of joint book reading shows significant differences in the semantic features of the activity according to social class. [P. 32]

彼が一緒に本を読む活動を大規模に調査して統計的に分析した結果、社会階級によってこの活動の意味論的な特徴に大きな違いがあることが判明した。

この翻訳例では *shows* という現在時制を「判明した」と過去時制にしている。このような言動過程節では、6.1.3で論じたように参与要素を状況要素に変えて、「分析によって…が示されている」という表現も可能であるがその場合でも、能動態から受動態の変換が必要になる。言

動過程節、特に show, illustrate, mean のような動詞で投射節を使って概念を表示する場合には、「…が～を示す」では、日本語として不自然である。特にこの例の場合には、主語が *statistical analysis* という行為なのだから、その行為の結果として、ある事項が明らかになったはずである。そのため、過去時制の「判明した」を使った。

SFL では時制は対人的メタ機能と関連し、出来事をどう伝えるのかということに関与する。時制を過去にして一過性の事実として伝えるのか、習慣的な出来事として現在時制で伝えるのか、あるいは予測として未来時制で伝えるかでは大きな違いが生じる。時制は一般的には助動詞によって具現化される定性により示され、どのような定性を用いるかが重要な選択となる。翻訳においても時制は原文の意味に沿って合わせるべきであろうが、安西 (1982: 139-140) は日本語の「タ」は必ずしも過去時制ではなく、確認を表すので、結果としての現在の状態を表すと解釈すれば良いと述べている。英語の現在時制はあくまでも現在の状態、継続的な習慣、不変の真理であるが、日本語で同様のことを現在形の「する・る」で表現できるとはかぎらない。たとえば、*I know him well.* は「彼のことをよく知っている」という継続的な表現になるし、*Do you understand?* なら「わかったか？」になる。したがって、原文の時制を尊重しつつ、過程構成のタイプや、参与要素で使われた語彙の意味機能を精査しなければ、適切な時制表現はできない。

6.2.2 役割関係 (tenor) を考える

役割関係 (tenor) とは状況のコンテキスト (Context of Situation) の一つの要素であり、言語表現をやり取りする話者と聞き手、あるいは作者と読者の関係である。役割関係は単純にメッセージの送り手と受け手ということだけではない。それぞれにどれくらい心理的距離や社会的距離があるかということが問題になり、その遠近によって敬意表現などの必要性が生まれる。また共有経験の大きさにより言語表現の量にも影響を与える。

翻訳においてこの役割関係が関与するのは想定される読者ということになる。すなわち、読者が翻訳される書籍で扱われているテーマについてどれほどの知識があるか、あるいは学術書の翻訳であれば、専門用語にどれほど精通しているかを想定しなければならない。今回の翻訳テキストは学校教育に携わる人、あるいは将来学校教育に携わる大学院生を想定して文体は「である」調を使い、名詞句などは理解できると考えられる範囲では、そのまま情報を解凍しない場合もあった。

しかしながら、SFL のように言語学や言語教育に携わるものでさえ馴染みが少なく、使われる専門用語に精通していない場合もある。単にテキストを翻訳するだけでは本当の理解を読者に促すことができない。したがって、今回の翻訳書では原著にはない SFL の解説を別途20

ページほど、上智大学の石川教授と筆者が共同で執筆した。読者の共有経験の有無を考慮して、このような補足を行うことは、広い意味において本当の原著テキストの機能を翻訳することと言えるであろう。

6.3 テキスト形成的メタ機能

6.3.1 態 (Voice) を変える

The ways of meaning that children bring to school need to be recognized, respected, and further developed. [p. 41]

子供たちが学校へともたらず意味の作り方を、認知し、尊重し、そしてさらに成長させる必要がある。

英語では一般の人が主語になる場合や、目的語を中心として情報を構築していく場合には受動態がよく用いられる。もちろん、被害者の視点でも受動態は使われる。ところが、日本語の場合の受動態は被害、迷惑、利益に関する場合に使われる(安西、1982: 154)。したがって、英語の受動態をそのまま日本語の受動態に翻訳しても意味が通じにくい。当該の例では「意味の作り方が認知され、尊重され、成長される必要がある」という意味なのだが、誰が認知して尊重するかは明示されておらず、前後の関係から一般の人々やこの本を読む教育関係者ということになる。一方、これをそのまま日本語にすると、誰に認知され尊重されるのかを明言しなければ理解しにくい。まして、認知や尊重、成長は被害や迷惑、利益という範疇に入るとも考えられない。したがって、態を受動態から能動態に変換している。

安西(1982: 148-180)で、受動態を翻訳する3つの方法として、(1) 能動で訳す、(2) 受け身のままにする、(3) 翻訳調を生かして受け身にする、としている。(1)の場合には取り立ての「は」を使うことを推奨されている。(2)の場合には、日本語の受け身が被害、迷惑、利益に関することから、主語が人間であることを条件としている。さらに(3)の場合は学術的な文章の場合にはあえて受け身を残して、翻訳調というスタイルを維持するということが述べられている。

SFLの観点から態の違いを考えると、何を主題化するかということと関連する。英語では受動態を用いることによって、行為の対象(Goal)が節頭に配置され、主題となる。能動態では行為者(Actor)が節頭に置かれ、主題となるため、語順が大きな意味をもつ。ところが、日本語の場合には能動態でも受動態でも語順に変化は生じない。むしろ、安西も述べているように、採りたての「は」を活用し、主題化することによって、情報構造を維持できる。した

がって態については起動性 (ergativity) の観点から起動者 (Agent) が人であれば受け身を使い、抽象的な原因や要因となる場合には能動態を使うという方略が有効と考えられる。

6.3.2 英語特有の言い換えの対処

Other researchers have looked at this activity differently, showing that the IRF sequence can function in different ways in the classroom. Whether or not this participation structure is effective in helping students learn depends on how the teacher uses it, and at what point in the lesson.

しかし、このような活動を異なった視点で見る研究者もおり、IRF の連続体には教室で異なった機能があると示している。IRF の連続体は生徒の学習を助けることに効果があるのかどうかは教員がそれをどのように使うか、そして、授業のどの時点でそれを使うかということにかかっている。

下線の部分はもともと「この参加構造」であるが、これは IRF sequence の言い換えである。英語の場合は言い換えによってもそれが前述の IRF だとわかるが、日本語で、「この参加構造」としても前述の IRF との関連性は見えない。英語では「the+ 名詞」によって言い換えをして前出の名詞に言及する。このような言及の関係はテキスト形成的メタ機能においては照応 (cohesion) として扱われ、節と節の意味がどのように語彙のレベルでリンクされているかということと深く関係する。英語では同一の語彙を繰り返すことは好まれず、代名詞や類義語、あるいは「the+ 名詞」というバリエーションを駆使して照応関係を築く。一方日本語では「the+ 名詞」をそのまま訳したところで照応関係が見えない。むしろ、繰り返して同じ語彙を繰り返すか、代名詞を使うことで意味を明示化することができると考えられる。

6.3.3 コンテキストから語彙の意味をとる

Their out-of-school experiences socialize them into the ways of using language that are valued at school, so they can rely on their their intuitions about language to achieve success.

このような生徒たちは学校外での経験によって、学校で評価される言語の使い方に順応する。そして、結果的に言語については直感に頼ることができて、学校で良い成績をおさめることができる。

今回の翻訳プロジェクトの中でどのように翻訳をするか悩んだ語彙が幾つかあるが、そのう

ちの一つが success である。辞書を引けば「成功」と出ているが、これを「学校で成功を収める」としたのでは意味が不明瞭となる。この場合、学校での成功とはどのようなことなのかを考えて、それを表現する必要があるのではないだろうか。したがって、今回のプロジェクトでは、success という語は「分かる、理解できる、良い成績をとる、良い評価を得る」と使い分けながら、訳出をした。

語彙が参照する意味はまさにコンテキストに依存する。コンテキストというと漠然としているが、SFL では状況の脈絡 (Context of Situation) が言語機能に与える重要性を鑑み、これを活動領域 (register)、役割関係 (tenor)、伝達様式 (mode) と因子分解して考察をする。今回は学校教育という活動領域によって success の訳語が案出されたが、役割関係によって呼称や人称代名詞の訳語が変わるであろうし、あるいは伝達様式により、言語の果たす役割が主か従か、すなわち構成的モードなのか補助的モード (Halliday, 1978) によっても選択される訳語は変わるであろう。翻訳の際には著者・翻訳者・読者という コンテキスト (一次的) と同時に、著作物の中におけるコンテキスト (二次的) を考慮しながら訳語の選択をする必要がある。

7. 結論

翻訳とは A という記号を A' という記号に変換する作業であるが、そこで変換される言語体系と言語機能は異なる。翻訳はその表層の辞書的な意味変換だけではなく、表出された言語機能の価値を目標言語における相当の価値に変換することである。そういう観点から Matthiessen (2014: 273) の「翻訳とはコンテキストに合わせて選択を行う意味の再創造である (translation as the recreation of meaning in context through choice)」という指摘は正鵠を得ている。したがって、翻訳では起点言語における表現の機能と目標言語における類似機能の表現を探し出す力が必要となる。

また翻訳は具体的なテキストが存在し、それを変換する作業である以上、一つ一つが特定の社会的目的、社会的文化的な環境の中で解釈・構築 (construe) されるものである。したがって、翻訳分析は事例研究の域を出ないという批判は宿命のように思われる。しかしながら、医療の臨床と基礎の相互補完的な関係と同様に、具体例の蓄積とそこから見出される汎用性から、特定の言語間における翻訳をする場合の方法論もしくは理論的枠組みを提示することは十分可能であろう。

註

1) 選択体型言語学では「^」を使って、順序を示す。

参考文献

- 安西徹雄 (1982) 『翻訳英文法』、東京：バベル・プレス
- Bache, C. (2008) *English Tense and Aspect in Halliday's Systemic Functional Grammar*. London: Equinox
- Baker, M. (1992) *In other words: A coursebook on translation*. London & New York: Routledge.
- Bateman, J. A. (2008) *Multimodality and Genre: A Foundation for the Systemic Analysis of Multimodal Documents*. Basingstoke: Palgrave
- Bode, J. (2008) Translation: The (Re-) Creation of a Source Text into a Target Text: A Case Study of Translating Japanese into Another Language. *Outside the Box: The Tsukuba Multi-Lingual Forum* 1.1. 14–18
- Christie, F. and R. Misson (eds) (1998) *Literacy and Schooling*. London & New York: Routledge
- Christie, F. and Derewianka, B. (2008) *School Discourse*. London & New York: Continuum
- Foley, J. A. (ed.). (2004) *Language, Education and Discourse: Functional Approaches*. London and New York: Continuum
- Halliday, M. A. K. (1978) *Language as a social semiotic*. London: Arnold
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1989) *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Oxford: Oxford University Press
- Halliday, M. A. K. and Greaves, W. S. (2008) *Intonation in the Grammar of English*. London: Equinox
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar 3rd edition*. London: Arnold
- Hatim, B. And Mason, I. (1990) *Discourse and the Translator*. London & New York: Longman
- 加藤澄 (2009) 『サイコセラピー面接テキスト分析』、東京：ひつじ書房
- Kahney, L. (2013) *Jony Ive*. New York: Penguin
- ケイニー、L. (関美和 (訳)) (2015) 『ジョナサン・アイブ』、東京：日経 BP 社
- Kress, G. (2010) *Multimodality: A Social Semiotic Approach to Contemporary Communication*. Abingdon & New York: Routledge
- Martin, J. R. (1992) *English Text*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins
- Martin, J. R. (1997) 'Analysing genre: functional parameters' in F. Christie and J. R. Martin (eds) *Genre and Institutions*. London & New York: Continuum. pp. 3–39
- Martin, J. R. and Rose, D. (2008) *Genre Relations: Mapping and Culture*. London: Equinox
- Matthiessen, C. M. I. M. (1992) 'Interpreting the textual metafunction.' In M. Davis and L. Ravelli (eds) *Advances in systemic linguistics: recent theory and practice*. London: Pinter. pp. 37–82
- Matthiessen, C. M. I. M. (1995) *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*. Tokyo: International Language Sciences Publishers
- Matthiessen, C. M. I. M. (2004) 'Descriptive motifs and generalisations'. In Caffarel, A., J. R. Martin, and C. M. I. M.

- Matthiessen (eds) *Language Typology*, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins
- Matthiessen, C. M. I. M. (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar 4th edition*. London: Arnold
- Matthiessen, C. M. I. M. (2014) 'Choice in translation: Metafunctional considerations.' In K. Kunz, E. Teich, S. Hansen-Schirra, S. Neumann and P. Daut (eds) *Caught in the Middle – Language Use and Translation: A Festschrift for Erich Steiner on the Occasion of his 60th Birthday*. Saarland: Saarland University Press. pp. 271–333
- Matthiessen, C. M. I. M. and Bateman, J. A. (1991) *Text Generation and Systemic-Functional Linguistics: Experiences from English and Japanese*. London: Pinter
- Morley, G. D. (2000) *Syntax in Functional Grammar: An Introduction to Lexicogrammar in Systemic Linguistics*. London: Continuum
- Munday, J. (2002). 'Systems in Translation: A Systemic Model for Descriptive Translation Studies'. In T. Hermans (ed.) *Crosscultural Transgressions: Research Models in Translation Studies II Historical and Ideological Issues*. Manchester & Northampton: St. Jerome
- 長沼美香子 (2001) 「日英翻訳における Theme に関する課題」、*JASFL Occasional Papers*. 2.1: 115–127
- 長沼美香子 (2005) 「大学における「翻訳教育の事例」—翻訳理論を応用した試み—」、『通訳翻訳研究』5: 225–237
- 長沼美香子 (2006) 「翻訳における「名詞化」という文法的比喩」、『通訳翻訳研究』6: 15–28
- 王珍珍 (2011) 「日中翻訳分析における選択体系機能言語学の役割についての考察」、神戸大学博士学位論文
- O'Halloran, K. L. (ed.) (2004) *Multimodal Discourse Analysis: Systemic Functional Perspectives*. London & New York: Continuum
- Peng, F. C. C. (2005) *Language in the Brain*. London & New York: Continuum
- Schleppegrell, M. J. (2004) *The Language of Schooling: A Functional Linguistics Perspective*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates
- Simon-Vandenberghe, A., Taverniers, M. and Ravelli, L. (eds) (2003) *Grammatical Metaphor*. Amsterdam: John Benjamins
- Tavernier, M. (2003) "Grammatical metaphor in SFL: A historiography of the introduction and initial study of the concept" in Simon-Vandenberghe, A., M. Taverniers and L. Ravelli (eds)
- 龍城正明 (編) (2006) 『ことばは生きている』、東京：くろしお出版
- Teruya, K. (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London: Continuum
- Thibault, P. J. (2004) *Brain, Mind, and the Signifying Body*. London & New York: Continuum
- 鳥飼玖美子 (編) (2013) 『よくわかる通訳翻訳学』、東京：ミネルヴァ書房
- Unsworth, L. (2000) *Researching Language in Schools and Communities*. London: Cassell
- Wang, B. (2014) Theme in Translation: A Systemic Functional Linguistic Perspective. *International Journal of Comparative Literature & Translation Studies* 2.4: 54–63
- Williams, G. and Lukin, A. (eds) (2004) *The Development of Language*. London & New York: Continuum
- 柳文章 (1982) 『翻訳語成立事情』、岩波新書、東京：岩波書店